

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

静寂境

――マルコ伝第1章35～45節――

1964年4月26日

小池辰雄

宣教 死活の言 「よし、潔まれ」 魂の救と病の癒し 神の世界の象徴 父の懷に 無的実存
四つの十字架 十字架という門 静寂境

【マルコ1・35～45】（私訳、一部文語訳）

35 朝まだき暗き程に、イエス起き出でて、寂しき処にゆき、其処にて祈り
いたもう。 36 シモン及び之と友におる者ども、その跡を慕いゆき、 37 イエスに
遇いて言う『人みな汝を尋ぬ』 38 イエス言い給う『いぎ最寄の村々に往かん、
われ彼処にも教を宣ぶべし、我はこの為に出で来りしなり』

39 こうして、彼は町々の礼拝堂に入つて伝道しながら、ガリラヤの全地を
巡り、悪霊をも追い出した。 40 ところで、御許に一人の癩病人がやって来て、
彼に頼みこみ、跪いて言うには、『よしとお思いなら、きつと私を潔めるこ
とがおできになります』。 41 すると、イエスはあわれみ憤つて、御手を伸べ、
彼に触り、彼に言つた、『よし、潔まれ』。 42 すると直ちにレプラ（癩病）は彼
から抜け出て、彼は潔められた。 43 イエスは彼を厳しく戒めて、直ちに彼を
追い出し、彼に言うには、 44 「いいかね、誰にも何も言うなよ。行つて、自
分を祭司に見せ、モーセが命じたものをお前の潔めのために献げるがいい。
証しのためだぞ。 45 ところが、彼は出ていくと、いろいろと語り伝え、この
出来事を言いふらしたので、イエスはもはや公然と町には入ることができず、
外のあちこち寂しい所に彼はいた。するとまた、人々が方々から彼のみもと
にやつて来た。

● 宣教

35 朝まだき暗き程に、イエス起き出でて、寂しき処にゆき、其処にて祈り
いたもう。 36 シモン及び之と友におる者ども、その跡を慕いゆき、 37 イエスに
遇いて言う『人みな汝を尋ぬ』 38 イエス言い給う『いぎ最寄の村々に往かん、
われ彼処にも教を宣ぶべし、我はこの為に出で来りしなり』
と。キリストがイエスとなつて現れてきたのはそのためである。



"no other can I do."

「別な具合には出来ない」

という。それは必然の世界です。天的必然の世界です。天的必然で、もはや人間の側の選択ではない。「ざるを得ず」と。これが本当の自由という。天衣無縫的な自由です。

ところで、「ケリグマ」「宣教」という字ですが、キリストは伝道、宣教につかれる。キリストにおいては、神の言を伝えるということが、

「わが言は靈なり、生命なり」

とは、極めて大事なキリストの宣言です。ヨハネ伝6章にある。「靈なり生命なり」でないような言はキリストは伝えていない。だから、聖書を読んで、即ち、キリストに語られて――我々が聖書を読むということは、キリストに語られていることなんです。自分の目でもって何か理解しようと思つて読んでいるのではない――キリストに語られているものを、心眼で見、心耳で聴くわけです。心の眼で見、心の耳で聴く。それが即ち、キリストの言葉を、伝道を、宣教を受けとる角度です。これは頭で理解して、

「分かるの、分からないの」

と言っているうちは、いつまでたつても本当の世界に入れない。「宣教」という言葉が非常に浮いてしまっていることをいつぱい深く自覚して、破らなくてはいいかん。

キリストはなにも、神癒や奇蹟をしに來たのではない。イエスは伝道しに來た。キリストにとつては、病を癒すことも、言葉を発することも、その根源は一つなんです。それが、ある時は病を癒すことにも、ある時はそれが言葉にも、自由に言・行に展開する。言・行は一如の質です。この言は、人を審きながら救う言葉です。この行は、サタンを追い出しながら、癒す行です。どちらにしろ、これは神の福音の力あるところの言であり、行であつて、正にキリストの言行は一如である。これを別々に考えるから、

「言葉、言葉」

と言つて、儀文にしてしまう。片一方はまた、一生懸命で

「神癒、神癒」

と言つて、そつちの方に傾く連中もある。どちらでもない。両方が本当に自由自在に、その奥の世界から発している。靈言・靈行であるわけです。靈の言であり、靈の行である。その掴み方をしないと、本当に樂に、そして囚われずに聖書を読むことができない。

●死活の言

そういう意味において、キリストの言は本当に死活の言です。私たちを殺すか活かすか。キリストの言葉に本当に体当たりしたら、私たちは倒される。しかし、倒されてこそまた本当に立たされるんです。

「恵福なるかな、靈の貧しき者、天国はその人のものなり」



と。誰がこの言葉に本当に及第できるでしょうか。本当に霊が貧しい人がいるでしょうか。私たちはみな霊が驕^{おご}っている。それが我^がというやつです。もう、最初の一言からして、キリストは「恵福なるかな」と非常にありがたいようなことをおっしゃっているけれども、

「霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

と非常に祝福の言葉だが、実はこれはするどい両刃^{もうは}の剣^{つるぎ}の言葉でもある。ところが、霊の貧しき人は一人もない。これにはみんな落第で、本当はその裏は、

「地獄はその人のものなり」

というようなわけだ。

「お前の現実 は 地獄だよ」

と言う。だから、このキリストの前に平伏^{ひれふ}す。その言葉の前に本当に平伏す。そのようにして、キリストの言葉が響いてきたときに、キリストの前に平伏すときに、キリストはその言葉を今度は、力として生命として私たちに与えるんです。降参する者には与えて、これを本当に勝利させる。

「負けるが勝ち」

というように、負けた者が本当に勝利せしめられる。こういう世界です。全部これは不可能なんです、キリストの言葉の前に私たちは。落第なんです。不可能を、水を割らずに突きつけて、

「まあ、少しは仕方がない。霊が少し貧しいほうがいいよ」

なんて、そんな生易しいことをキリストはおっしゃらない。それに条件を付けない。断言命法です。三段論法ではない。

だから、キリストの前に降参すると、

「恵福なるかな、わが十字架によりて、霊が貧しくされた者よ、天国、即ち我、汝のうちに在り」

と響いてくる。それですっかり、このキリストの言葉でもって、そこが読めなくては。そこを掴^{つか}まえなかつたら、キリストの言葉を本当に掴まえられない。キリストはそれを何も説明なさらない。解説はされない。突きつけっ放しですよ。

「自分でこれを本当に掴め」

と。そこで真剣勝負です。だから、いわゆる聖書の解釈だなんて、ゴタゴタやったって、それはダメです。ぶつかって、そして本当にその前に倒されて、その命令は一体何だろうか。実は、「貧しくしてやる」ということです。

「不可能だよ、私の言うことはみんな。だけれども、貧しくしてやる。私の十字架に来てみる。ぶっ飛ばされているではないか。自我なんていうものは、この十字架でぶっ飛んでいるではないか」

と。これが即ち、キリストの伝道の言葉です。キリストの御言を受けとる私たちの角度は、



この水を割らざるキリストの深い言葉、激しい言葉の前に自分を投入していく。そうすると、不可能な素晴らしい言葉であればこそ、我々を本当の力ある、生命ある世界に入れる。それは、人間の条件付きの「教え」なんていうものとおよそ違う。福音というものはそういうものだ。激しいものだ。激しいものが実は、本当に支え、持ち上げ、それを完全に包み入れてしまう。この気合が、この呼吸が読めてこなければ、いくら聖書を読んだってダメですよ。そのかわり、マタイ伝5章の最初の言葉が本当に化体し、身体に付いてきたら、あとはグーッと読めてくる。「そうだった」と、あなたの方のはらわたの中から叫びが——なにも叫ばなくなつていいけれども——呼吸が応じてこなくては。

●「よし、潔まれ」

39 こうして、彼は町々の礼拝堂に入つて伝道しながら、ガリラヤの全地を巡り、悪霊をも追い出した。

これは、言行こもごも自由自在というわけだ。悪霊を追い出して、その病を癒す。病は、キリストにとってはすべて根源的には、悪しき霊の働きです。これが言行一如ということ。発しては言となり、発しては行となるところの、本当の霊の世界です。これが、「ウルボルト」（根源の言葉）、「ウルタート」（根源の行為）の世界。「ウル」の世界です。「ウル」というのは「根源」という意味です。

40 ところで、御許に一人の癩病人^{らいびん}がやって来て、彼に頼みこみ、跪^{ひざまづ}いて言う

には、『よしとお思いなら、きつと私を潔めることがおできになります。』

「よしとお思いなら」と私が訳したのは、「御意^{みこころ}ならば」でもいいけれども、言葉としては、「御意だ」なんて、そんな体裁ぶつてやしない。

「あなたが、よしと思えば」

と、こういう気持です。

41 すると、イエスはあわれみ憤つて、

こここのところの日本語の訳が、どうも弱い。「あわれんで」とか何とか訳してあるでしょ。あわれみの気持はあるが、これは非常な憤りを持っている。

「病者をあわれみ、そして悪霊を憤つて」

という、両方が引つ掛かつたような言葉です。悲しみ憤つてという、「悲憤して」ということ。

「この悪い霊は、なんとまあ、この人を癩病で苦しめているか」

という、悪霊に対する神の子の憤りです。これが「あわれみ憤つて」という境地なんです。サタンに舐め^なられてはダメですよ。サタンに対しては厳然として、

「サタンよ、退け！」

と言われる。だから、

あわれみ憤つて、御手を伸べ、彼に触り、彼に言った、『よし、潔まれ』。



「よし」というのは、「わが心なり」ということです。「われ欲す」「可なり」ということ。「それでよろしい」という意味の「よし」ではない。「よし来た」の「よし」です。「潔まれ」は、直訳すれば、「潔められよ」ですけれども、日本語では「潔められよ」なんて言いやしない。「潔まれ」でいい。キリストというひとの火のような激しさを、こういうところで掴まえないければダメです。「神の力によって潔められよ」なんです。

「私を通して働くところの神の力によって潔められよ」

と。「よし」というのは、「わが意なり」というのは、神の意を受けて言うところのキリストの言葉です。キリストは「わが意」と言ったって、決して我意の我ではないんだから。神の意を受けて「わが意なり」と言われる。

「神の意を今、私は意としているぞ。潔められよ。神の御力によって潔められよ」

と。ということは、同時にサタンに対する憤りをもっていますから、非常に力強い言葉です。

●魂の救と病の癒し

だから、神意に絶対信頼すると、神意のあるところには必ず力がある。神さまの御意と
いうのは、そう思っているだけではなくて――

「我思うゆえに我あり」

なんて、そんなのではない。そんなデカルトなんていうのとはおよそ違う。「神が思う」という、この「思う、意志する」は――神が欲する思い、神が欲したもうところには、意志したもうところには、必ずそこに本当の力がある。生命がある。成就する。だから、キリストが、

「よし、潔められよ」

と言えば、潔まる。私たちがよく潔められる。私たちの欠陥というものはみな根源的には癒されていく。御意です。

昔の無教会の信仰では、

「病気を感謝する。病気がありがたい」

と言っていた。病気そのものは何もありがたくない。病気のために魂がくずほれて、神の世界が開示してくれば、病気をひとつの契機として、それを感謝することはいいけれども、病気そのものは何もありがたいものではない。病気というやつは、何か別なやつが働いてきているものですからね。神の世界に病気なんていうものはない。

「キリストは病を負う」

というのは、キリストは他の病を負い、他の罪を負ったのであって、キリスト自身は絶対に病んでいはいしない。キリスト自身は汚れてはいない。彼は聖なる者であり、彼は健やかなる者である。健やかならんとし、聖ならんとすることは神の御意ですから。その時に、御意が本当に発動するところには、自由に――



「いや、もう少しそのところにいなさい」

と言うならば、それを耐え忍んで――なお学ぶべきことを学んでいく。それは、その一人ひとりの、その時その時のいろいろな内容をもっているわけです。

⁴²すると直ちにレプラ（癩病）は彼から抜け出て、彼は潔められた。

「レプラが抜け出た」と書いてある。そこから退散される。

「昔の人は病をやまいをそう思った」

なんて、普通は思うわけです。けれども、キリストには具体的なその病の作用が見えていくから、それで「抜け出る」と言う。その人を苦しめている何ものかが、またその人の魂そのものの中にある欠陥というものが、他のサタンの作用によって害せられていますから、そいつが抜け出て、その病が癒されると同時に、魂が健やかにされていくということが同時に起こるわけです。

その時に、魂の救というものと病の癒されるということが、やはり分かつことができない。この受けとり方をしないと、いわゆる「病氣、病氣」と言つて、病に囚われたら、たとえ治つたつて、ちつともそれは本当にさいわいなことではない。ところが、人間は肉体上の欠陥がありましても、魂の世界が健やかになつていけば、たとえば肉体上の欠陥があろうと、その人は本当に健全な人である。大事なのは、どこまでも魂の世界です。

●神の世界の象徴

⁴³イエスは彼を厳しく戒めて、直ちに彼を追ひ出し、彼に言うには、⁴⁴「いいかね、誰にも何も言うなよ。行つて、自分を祭司に見せ、モーセが命じたも

のをお前の潔めのために献げるがいい。証しのためだぞ。

と、厳しく戒められた。

「神癒的な働きをなさつた時に、それが御利益教と思われてはいけないから、それでそういうことをキリストは言われた」

と、普通の観念信仰の人たちはそういうように思う。そうではないんです。イエスにとつては、さきほど申しましたように、それが病の癒しであろうと、言葉であろうと、もとは根源の霊の世界から発している。この霊は神の霊で、彼は特に神の人――神人、メシヤ、本当に地上に救いをもたらすところのメシヤ――として現れて来られた自覚をもつておられた。メシヤたることを公に知らせるにはまだ時期が早い。これは伝道のまだ初期ですから。イエスは、或る目的を達せられたら、その先はもう十字架ですから。その時にははつきりと自分はメシヤであることを宣言される。「神の子」であることを言われる。

「神の子」「メシヤ」と言つたら、これは大変なことなんだ。「神の子」と言えば、もう穢けがしごとになる。「罪を赦す」なんて言つたら、とんでもない穢しごととなつて捕まえられる。排斥される。ユダヤ人は「メシヤ」というのを理想王国を築く者と思つていますから。「メシヤ」



と言ったら、ローマに対しては政治犯になる。だから、そのことをそう早くは現してはいかんから、悪霊が

「神の子よ、聖者よ」

なんて言ったら、またこれも厳しく戒めれて、

「我を現すな」

と言われた。これもそうなんです。

「厳しく戒められて、直ちに彼を追い出した」

という。

未だかつてないようなことが現象したら、みんながだんだん言いふらす。実際、言いふらしてしまった。だから、キリストも迷惑と思われたわけです。そういう意味において、厳しく戒められた。1章34節や、3章12節、5章43節、7章36節、8章26節をご覧になると、みなそういう角度で戒められたことが書いてある。

「²⁶斯て『村にも入るな』^{かく}と言いて、その家に帰し給えり。」（マルコ8・26）

これは、盲人の目をあけた時ですね。

イエスにとつては、いわゆる神癒的ないやしの働きは、メシヤたることの、その秘密のひとつの徴、現れとして、彼は自覚しておられた。神の国には、神が支配したもうところには、罪もなければ病もない世界です。地上では、それは来ない。いくらキリストが癒しをなさろうが、素晴らしい言葉を発つされようが、現実には来ない。けれども、それはやがてくるそういった世界のひとつの徴としてある。キリストが「徴」と言うときには、そういった神の世界の象徴として、神の支配の現れとして自覚されたのであって、ユダヤ人が「徴を求める」というときの「徴」は、それ事態が目的であるような現世的なものなんです。けれども、キリストが徴を現しながら、

「徴を求めてはいけない」

と言われたのは、この「徴」の意味の取り方が全然ちがうわけです。ところが、民衆はみんな、このキリストの徴を御利益的な徴に受けとってしまうわけです。だから、彼らは本当の信仰、本当の救に入らない。弟子たちでもそうです。

どうしたら、それが本当に分かることになるかといえば、イエスが十字架に架かるまではしょうがない。まだ、十字架に架かっただけでも、またしょうがない。みんな、散ってしまった。落胆してしまった。けれども、キリストは約束しておられる。

「私は甦える。今に聖霊をくだす。そうしたら、今まで私の言ったこと、したことが本当に分かるぞ」

と。キリストは、先の先までちゃんと見ておられる。聖霊がくだるまでは、キリストの言葉も行為もどうにもならん。だから、我々が御霊を受けなければ、聖書は読めないんです。いくら、クリスチャンが研究したってダメなんです、聖霊を受けるまでは。聖霊のバプテ



スマを受けるまでは、聖書は本当に読めない。

もうはつきりしているんだ。事実が証明している。私自身がそうだった。あるときから、本当に

「なんとこんなにも躍動している文字であるか」

と、驚いたんだ。それまでは、分かったようなつもりでいたけれども、本当はベールが掛かっていて。このベールは限りなく外されていくのであって、私は「これでいい」なんて自分を決めているやしません。死に到るまで限りなく前進するだけのなし。前進せしめられるだけのなしです。

●父の懷に

モーセが命じたように――らい病の潔めのことが旧約のレビ記や何かに書いてあるから――祭司によく証^{あかし}をしろと。「証のためだ」という。他のものをちゃんと献げる。イエスはまた、非常にそういうところは形式的にちゃんと旧約の宗教を一応立てておられるわけです。

⁴⁵ところが、彼は出ていくと、いろいろと語り伝え、この出来事を言いふらしたので、

もう嬉しくてしょうがないから、こらえ切れないで、イエスの言うことを聞かない。

イエスはもはや公然と町には入ることができず、

というのは、みんなが押し合いへし合いでやって来て、キリストに助けを求めるわけだ。

外のあちこち寂しい所に彼はいた。するとまた、人々が方々から彼のもとにやって来た。

始末がわるいですね。ここにも、

「寂しい所に彼はいた」

とある。イエスが、寂しい所、曠野、深山幽谷というような所に行かれたのは、言うまでもなく、祈るためである。その祈りは父の懷に。「寂しき所」というのは「父の懷に」という意味です。寂しいというよりもむしろ、幽玄^{ゆうげん}の境地です。幽寂^{ゆうじやく}でもいい。幽寂の境地に入る。祈りは、自分を神の懷の中に――最終講義の時にも書きましたように――内接円的に神の中に自分を入れる。「懷に」というのは非常に日本人にはいい言葉です。乳飲み子は母の懷に休らう。キリストは神の懷に深く入って、そして、祈りにおいて神の生命を深く受けられた。

この静けさというのは、ただ魂が鎮^{しず}まる――鎮魂曲、「レクイエム」という曲があるけれども――ただ鎮まるためではない。静けさの中は、もの凄い力、生命です。それは靈的なものです。この靈生、靈力というものをキリストはこの祈りの世界で深く受けとられるわけです。祈りは、こういうことにならなかったら、いくら口数多く祈ったって、祈りが整ったって、それはダメですよ。天に届かない。自分を投入しなくては。その祈りが非常に大



事なわけです。

旧約の預言者の中でそういう深い祈りをした人はエレミヤです。預言者エレミヤが一番そういった意味において、祈りの深い預言者でした。モーセはもちろん素晴らしい祈りの人でしたが、モーセ、エリヤ、アモスというような人たちと、ホセヤ、エレミヤといううなのとはちょっと質が違う。モーセやエリヤは非常に――あるいはエリシヤにしても――執成しの祈りの方が強い人です。もちろん、祈りの執成しは大事なことです。エレミヤにも、もちろんそれはあったけれども。特に個人的に深い、魂の深い祈りをしたのはエレミヤである。

そのことは、ハイラーというドイツの学者が「ゲベート（祈り）」という大きな本を書いている。これは名著です。1920年頃に書かれた本ですけれども。その本にハイラーが――これは私も大いに賛成なんです――

「あらゆる詩篇の言葉の中で最も深いものは、『もしも私が汝を有つならば、天にも地にも何もものも自分は求めない』（詩篇73篇25節）である」

と書いてある。私はかつて詩篇73篇を解説したときに、

「天上天下誰をか慕わん、ただ汝あるのみ」

と訳した。天上天下誰をか慕わん。天の上にも天の下にも、我が慕うべきものはただ汝だけである。これが最も深い祈りだと。これがキリストの心であった。また、エレミヤの心であった。

「天上天下ただ汝のみ」

と。イエスにとっては、この信頼する父のみであった。「父よ」「アッバー」と。

●無の実存

ヘブライ語の字引で一番先に出てくる言葉は「父」という字なんです。「AB」ですからね。「アッブ」というのはヘブライ語で「父」という字です。あなた方、この言葉だけは覚えておいてください。これは簡単だから。いくら忘れようとしたって、忘れられませんよ。「父よ」と呼ぶときには、「アッバー」となる。アラミ語ですけれども。ヘブライ語の字引に一番先に出てくる言葉が「父」という字なんだ。素晴らしい言葉だな。これがアルファにしてオメガだ。アレフにしてタウだ。始めにして終りです。

「父と言うなら、母はどうしてくれるか」

なんて、そんなことを考えるのではない。依り頼む人格的な対象として、キリストは神のことを「父」と呼ばざるをえなかった。その他に呼び方がなかった。何か偶像を、お爺さんを考えているのではない。その父の懷に本当にキリストは自分をとつぷり入れる。彼は完全に父の似姿となつて父の姿を現象した、父の現象体であるわけです。だから、

「我を見し者は父を見しなり。我を見し者は神を見しなり」



と言えたんです。すっかり彼は現^{うつ}し身の姿になってしまった。私たちは直接にキリストの真似をしたらいかなんですよ、イエスのように。

ハイラーが言うのに、

「イエスの神との交わりというものは、全く人格的な心の、神との心の交わりであつた」

と。心と心。ハートがハートに触れる。けれども、それは「心」と言いましても、本当に「霊」です。霊と霊の触れ合いです。霊的な触れ合い。もうそれは何とも言えない。霊・魂・心が一つです。

「霊・魂・心というのが、神さまと本当に自分が一つになる」

ということとは、完全に神の霊・心というものを自分の中に受けとるから、そこで、聖意というものが彼の中に入ってくるから、彼は聖意を体現できた。

「汝の聖旨^{みむね}を、汝の欲するところを為してください。私ではありません」

と言って、自分を放り出していますから。自分を正に放り出してしまつて、自分の意志なんてものは無いんだ。これを無^む的^{てき}実^{じつ}存^{ぞん}という。

私の「無^む的^{てき}実^{じつ}存^{ぞん}」という言葉を非常に誤解して、何のかん^{かん}のと言う人がありますが、私に、私に、私に、虚無ではないんです、この無は。無私なんです。私というものが無い、私心の無い、無^む的^{てき}実^{じつ}存^{ぞん}なところ^{ところ}に在^あつて、本当に神の意志を実存するのが、キリストの実存です。

『曠野の愛』誌第33号(1960年春季号)に「無^む的^{てき}実^{じつ}存^{ぞん}」という題で私は書いた。内村鑑三、三召天三十周年記念号だ。あれが一つの、今までの無教会の或る者たちに対する、私の非常な反論である。誰が何と言つても、このキリストの無^む的^{てき}実^{じつ}存^{ぞん}を私は絶対に否定するわけにはいかない。死に到るまでこれを唱えて私は仆れるよ。

イエスという方は本当に、神一切としている。ただそれは命題的に一切としているのではない。本当に神の霊を、御意を自分のうちに体して、平伏しであるからこそ本当の權威である。神の前に絶対に平伏しているから、本当の權威を彼は持っていた。

こういうような静寂境の中は、驚くべき動的な生命の溢れているところの世界です。私たちはその真似をしたら、うっかりすると、いわゆる神秘主義になってしまう。その真似をしてはいかん。私たち罪びとがキリストの真似なんかしたら、とんでもない話だ。

●四つのLの十字架

ドイツ語で、リッヒツ(光)、レーベン(命)、リーベ(愛)、ルフト(霊)の頭文字はみんなLだ。この四つのLの字を回転して集めると十字架の形になる。キリストは、

「我は光なり。汝らは世の光なり」

「我は生命なり、復活^{よみがえり}なり」

と言われる。また、



「神は愛なり」

と。彼自身が即ち愛である。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主たる汝の神を愛すべし。隣人を己の如く愛すべし」

という。「己の如く」というのは、

「自分を愛してもいいが、また隣りをそのように愛す」

なんていうのではない。

「人間は自己愛がいかに強いのか。そいつをひっくり返して、隣人を愛せよ。それが本当の愛だ」

ということですよ。それができない。みんなできないことを私たちに突きつけている。

それから、「ルフト（気）」即ち、これは霊です。キリストの御霊、キリストの愛、キリストの光、キリストの生命は、¹が四つでちょうど十字架の形をなしている。キリストの十字架を通してこれを受けとる。このことをはつきりと伝えたのがパウロです。パウロは祈るときに、

「主イエス・キリストに在りて」

と言う。書簡の始めにも、

「死人のうちよりキリストを甦えらせたまいし神によって。キリストにおける、

キリストの恩寵が、恵みと誠があなた方にあるように」

と。みんな、キリスト中心に、キリストを絶対の媒介として祈っている。私たちは祈るときに、

「聖名によりて」

と言うのが、そのことです。

「キリストの聖名によって、この祈りを受けとってください」

ということ。手離しで神さまに直接にはダメです。

「キリストの執成しによって、御霊の執成しによって、どうぞ受けてください」

ということです。我々の祈りは、キリストを通らなければ、絶対に神のところに行かない。キリストは我々の救い主、主であるから。

●十字架という門

私たちは、この十字架という門を通って――

「我は門なり」

と言うが、

「我は十字架という門なり」

ということ――この十字架という門を通って、キリストの懷の中に入る。そうすると、キ



リストの光、その生命、その愛、その御霊が我々の中に入ってくる。これが本当の、この静寂境において我々がその驚くべき内容を、豊かな内容を受けとるところの祈りの事態です。

そのような祈りが、御霊を静かに魂の奥底で深く受けとるときに、一切の我々の生活の原動力となる。何をしようが、どのように動こうが、本当の創造的な、また^{あた}辺りを喜ばせ、光らせ、生命づけ、また霊的な波動を与えていくような、そういう人になるわけです。だから、このような者を通して、神さまは時々不思議なことをなさるわけです。皆さんを通して、なさるわけです。

「我が証人^{あかしびと}となれよ」

というのが、それです。

「私を身をもって証^{あかし}する人となれ。身証人となれ」

と。身をもつて証する人となる。これが本当に福音を受けている在り方です。福音とは、喜びの音信^{おとずれ}とは、喜びの音信そのものと私たち自身になるわけです。そのためには絶対にこの祈りの世界を通らなければ、いくら聖書を読んで分かったようなつもりでいても、それはダメです。祈りなきところには、聖書は完全に鎖^{とぎ}された本です。祈り心をもって、この扉を、十字架の扉から御霊と生命の世界に入る。永遠の生命、永遠の愛。永遠の光、いかなる暗雲をも貫いているところの光の世界、太陽の光よりもつと素晴らしい光の世界です。

「心に太陽を持て」

と言うけれども、我々の太陽は、このキリストという太陽を胸に宿すところが祈りの世界です。

我々が「父よ」と祈っても、「主」に在って「父よ」と祈るのであって、また、それが直接に「主よ」と祈ることと「父よ」と祈ることは、そこにおいても一つです。私は初め、

「三位一体の神と言って、時々クリスチャンが神さまに祈るかと思えば、またキリストにも祈るといふのは、どうも心が分裂して、どういうことかな」

と思っていただけでも、どっちに祈ろうが、それはパウロにおいてもそうですが、全くそれは一つのことである。そして、主に在ってこそ、私たちは父に行ける。キリストを「主」と、「救い主」と本当にはらわたの底から叫ぶところに、「父よ」という言葉が出てくるんですから、そうでなくて、「父よ」「神よ」なんて言っただけで、それはダメです。

●静寂境

これが我々が日常生活において、いかなる時にも実はこの静寂境の中に入る。それはまあ、新宿なんているのは大変な所だ。今に、東京の中心位に大きくなりそうな所です。我々はこの静かな所を集会に与えられて、不思議に思っています。



私たちの魂の世界は、そういう本当の静寂境に入って力を得たら、さあ今度は、皆さんが幾人かで祈るときに、静かにも祈れば、嵐の如く激しくも祈れば、小川の囁きの如く穏やかに祈れる。自由自在です。

「どうも、あの人たちはばかに激しい祈りをするから、嫌だ」

とか、片一方は、

「ばかに静かだが、どうだ」

とか。静けさであろうが、何であろうが、そこに本当の底力が、本当の生命が溢れていなかったらダメですよ。どんなにまた激しくても、それがうわつた激しさではダメです。

大自然の如く魂は自由自在というわけです。キリストくらい自由自在な、自然よりも自然なひとはない。我々クリスチャンというのは、一切の限定がいらん。昨日も、或る学生が

「カトリックはいろんなやかましいことを言うようで、あれは困る」

なんて言っていたが、それは困るですね。別にキリストは何も限定しておられない。キリストの言葉は実に、柳を見ればその柳からキリストはすぐ真理を掴まえてものを言ったり。この福音の世界に入ると、私たちは柳の如く柔軟心を持っている。

そういうようなわけで、無限定でありながら、実にそれが学問の世界であろうと、事業の世界であろうと、台所の世界であろうと、何であろうと、その人がその時その時に本当に創造的な動き方をもって、無法則の本当の法則、天則が、靈法がそこに働いていくようなことになっていくわけです。これが、

「律法はもはや私たちを縛らない。本当の天の靈法が動くのだ」

と、パウロがローマ書8章で言っているとおりです。

「一切の秘訣を得たり」

とパウロが何故言ったかというところ、この世界に入ったからです。

「われキリストの中に、キリストわが中に」

と言っている。

本当にそれは救い主ですから、私たちは遠慮することはない。どんなにこつちがダメであろうとも、そのままぶちまけていけば、キリストは直ちに素晴らしい世界に入れてしまう。そして、すべてのことはそこから始まる。福音は絶対無条件のものを与えながら展開していくんです。いわゆる修養の世界は、

「さあ、こうなれ。ああなれ」

と言って、一生懸命で条件付けて駆り立てるけれども、福音の世界は無条件に与えて、

「さあ、この力で行け」

と言う。それはみんな神の栄光の、キリストの栄光の現れとして展開する。だから、毎日が本当にはりが出てくるわけです。人間だから、いろいろな気分が起きたり、いろんなこ



とになりますよ。「けれども、どっこい」と言って立ち上がることが出来るものはこれなんです。その時に本当に、いかなる所においても、いつなりとも、魂の奥で直ちに静寂境に入る。深く心の奥で、「主よ」と呼ぶ。

「あなただけです。天上天下、ただあなただけです」

というところに入って、それで行くわけです。エレミヤという人が率直にいろいろ祈って、そして、

「あなたは私をとうとうねじ伏せてしまった。私の中に火が燃え付いてしまつて、あなたの言葉を語るまいとしても、黙すに耐えがたし」

なんて言っている。これはみんな、エホバの霊にエレミヤが本当に一騎打で体当たりして、これと取っ組んだから、そういうことになる。取っ組んで、あのヤコブのようにねじ伏せられて、立ち上がる世界です。

降参して、本当に立ち上がる世界です。それが即ち十字架です、私たちの降参する対象は。十字架に平伏し、十字架されることによつて、ウワツと今度は生命にぶつか。何が残りますか。何も残らないではないですか。あなた方は十字架されて、何が残るか。何も残らない。あとは、キリストの御霊の生命を無条件にくださるから、「はいっ」と言つて、立ち上がるだけです。何をか言わん。どうか、

「はい、そうです。その通りです」

というわけで、そういう福音の、何とも説明できないこの静寂境を、いついかなるところでも胸に持つところの、そういう魂となつてください。その静寂境の中には、驚くべき四つの十字架形をなしたところの、光と生命と愛と霊が働く。おしまい。

